
真・恋姫夢想 ～ 史上最強の漢～

シャケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫夢想 ～史上最強の漢～

【Nコード】

N1869V

【作者名】

シャケ

【あらすじ】

現代で不良と呼ばれていた前田 仁は、パトカーにはねられて死んでしまった。そして、目が覚めたら、身体が縮んでしまっていた（笑）。というか、恋姫の世界に転生していた。ちなみに全く本人は気づいていないが。とにかく前田仁、改め、仁はこの世界でどのように生きていくのであろうか。

漢 - 1 (前書き)

どーも、シャケです。

初投稿ですので、読みにくい等あるでしょうし、人物崩壊等ももしかしたらあるかもしれません。

それでも大丈夫な人だけが続きを読んで下さい。

また、アドバイス等がございましたら、書いて頂けると嬉しく思います。

漢 - 1

「ごめんなさいね……貴方を育てる事の出来ないこの母を許して……」

そう言つて、一人の女性が大きめのカゴを門の下に置き、泣きながら走り去つていった。

そのカゴの中には一人の赤ん坊が寝かされている。

（おいおい、転生して生まれ変わったと思ったら突然捨てられんのかよ！？ああ……あの新しい母さんもどっか行つたし……俺も赤ん坊やから動けんしなあ……）

俺の前の名前は前田^{マエダ}仁^{ジン}、一応高校生やつた。

何故俺が死んだのかというと、高1の夏休み中に廃工場で青春を桜花していたら（まあ分かんと思うけど、喧嘩ね喧嘩！）、思った以上の大乱闘に発展してしまつて（……確か地元の7つの高校の野郎共総勢400は越えてたな）警察が来たから逃げようとして道路に飛び出したらまさかのパトカーに………って感じやつたと思う。

それからの事は覚えてないけど、気がついたら今の状況って所ですね。

どうやら彼は男の子に転生したようだ。

そんな彼の今の名は、姓は孫^{ソン}、名は海^{カイ}、字は悟空^{ゴクウ}、真名を仁^{ジン}という。

（まあこれからどうなるんかねえ……ってこのままじゃまた死ぬな……）

この状況でも一人冷静に物事を考えている彼はかなり落ち着いた人物に見えるが、実際はあまり何も考えてないだけだったりする。

（よし、とりあえず泣いておこうか）

「オギヤア！！オギヤア！！ホギヤア！！オギ……」

案外泣こうと思ったら泣けるので、立ち上がれるかとも思ったが、まったく立ち上がる事は出来なかった。

「ホンギヤアアア！！」

（誰か俺に気づいてくれー！！）

??? side

とある森の中、一人の女性が颯爽と駆け抜けていた。薄い桃色の髪をなびかせ、褐色の肌の女性がその蒼眼にうつすらと涙を浮かべながら……

「うう………仁………」

私はあの子を捨ててしまった。
考えれば考えるほど罪の意識に囚われてしまう。

でも、あの人の最期の遺言だから……

私が愛した傭兵の最期の遺言だったから……

『もしも、産まれてくるガキが男だったら、一度何処かに捨ててやつてくれ。勘違いするな、確かに捨てはするが、それはコイツに自由にさしてやりたいからだ。王族のそれも長男として生まれたとしても、そいつにだって他にやりたい事があるやもしれんからな。何せ俺のガキだ、決められた道を歩きたいとは思わんだろうからな。よろしく頼むぜ、江蓮』

私が正しいとは思わない。

だけど、あの人の言葉を無下にしたくないの…

女性は立ち止まり後ろを振り向いた。
その瞳にはもう涙は無かった。

「孫悟空！！貴方は私、孫文台の息子なのだから、強く、自由に生きなさい！！もし、貴方がこの呉に武官もしくは文官として現れたなら、その時は……その時は、すべてを貴方に話しましょう。だからこそ強く生きるのです。我が愛しの息子、仁。母はいつも貴方の無事を祈っています」

そう言いきった女性は、また涙を流していたが、その表情は穏やかな聖母の表情そのもののようであった。

彼女こそ、姓を孫、名を堅、字を文台、真名を江蓮という、後に産まれてくる孫策、孫権、孫尚香の母であり、呉の礎を築いた『江東の虎』と呼ばれし英雄その人である。

仁side

もう泣けぬ、疲れたし、何だか眠い。また死んじまうのかねえ俺は……もう駄目だ、眠い、何か周りがウルサイがもはや目も開けれん位に眠い。

俺は迫りくる眠気に身を任せ、すぐに意識を手放した。

無事に生きていることを祈りながら。

まあ結果だけをいうと、生きることが出来たわけだ。

あの後、優しそうなおばちゃんの中で目を覚ました時は、喜びのあまり、小便漏らしてしまったからな。

拾われて2ヶ月程経った。

今の所集めた情報によると、俺が拾われたのは結構厳しい生活をしている農家で、家族は俺を拾ったおばさんと、その旦那だけ。

後この世界は、何か、かなり昔の世界みたいだ。何でかっていうと、農家がクワとか使って作業してるからだ。

あと賊がでるらしいからな、山賊みたいなものかな？

それに兵を集めてる所もあるみたいだけど、その格好がゲームで見た、三國志の兵隊みたいな格好やったしな。

ちなみに、俺の名前に中国になって思っているが、実際は分らない。

何故なら日本語だからだ。

何故情報が色々あるかというのは、おばちゃんがいつも背負って連れてってくれるからだ。

まあ色々と考えてみたが、全然分からん。

もともと頭は悪いからな。

結論として、とりあえず、この世界はこの世界で楽しく生きようか
なってるわ。

強そうな奴もいっぱいいるからなあ。

こりゃあ、楽しめそうだ。

漢 - 1 (後書き)

何かすみません。

孫悟空って自分で字を考えれ無かった自分が恥ずかしいです。

次回はちょっと時間を飛ばしていきます。

いつまでも赤ん坊では話が進みませんからね。

漢 - 2 (前書き)

すみません、果てしなく遅くなりました。

言い訳を言っても見苦しいと思うので言い訳はしません。

作者はカメよりもナメクジよりも執筆速度が遅いのです。

コメントをくださった方には遅くなりすぎて申し訳ない気持ちで一杯です。

漢 - 2

まああの後は、なんやかんやあったが、それを簡単に説明しよう。

0歳6ヶ月

俺が歩きだす。

義母が驚いて腰を抜かす。

0歳11ヶ月

俺が始めて喋る。

「メシ」って。

義母がまた腰を抜かす。

2歳

たどたどしいが、一応しっかり話せるようになる。

神童と呼ばれる。

義母を「おばちゃん」と呼んだせいで、全てを話してもらうことになる。

4歳

村の悪餓鬼どもと喧嘩する。

何か俺、結構強かった。

悪餓鬼って呼ばれたす。

5歳

村の悪餓鬼達の頂点に立つ。
(5〜12歳の子供)
クソガキって呼ばれたす。

7歳

大人との喧嘩に勝利する。

やっぱり俺は強いわ。

鬼の子と呼ばれるようになった。

12歳現在

最近じゃ、何処かで揉め事が起こると乱入してる毎が続いている。

つとまあ最近までを振り返ってみたが、俺喧嘩してばかりだな。

よし、今日は村にある大木の上で居眠りながら色々考える日にすることしよう。

俺は大木の近くまで行くと跳躍して一発で木のかなり上のほうの枝に乗り、持ってきた俺のお手製枕に頭を乗つけて村を見下ろしながら色々考えることにした。

うーん、しかし最近、こんな田舎の村の方へまで賊が出てくる始末……この国の総理大臣は何をやってるんだろうなあ。

たしかこの辺の領主の董卓は善政を敷いてるらしいが……善政ってなんだ？

まあなんにしても、結局この辺まで賊が出るんだから董卓の善政とかいうやつもまだまだだな。

この辺は比較的マシな方だと最近村にやってきた餓鬼が言ってたな。

じゃあ他のところはもっともって賊が出て、大変なんだろうな。

もしも、その賊がこっちの方に来たら俺は村を守れるんかなあ……………

今までこの村にやってきていた賊は20人ぐらいの少数の山賊で、来るたびに仁がボコボコにして追い返していた。

「ふあゝ、久しぶりに頭使ったから頭痛いわ……帰ってもう一眠りするかな。村もなんにも起きてなさそうだからなあ」

長々と考えていた仁が身体を起こして背中を伸ばしていると急に嫌な予感がした。

「うおっ、ゾクつとした！！何か嫌な予感するぞ。あっちの方かな」

仁は大木の上から飛び降りると急いで嫌な予感のする方へと走り出した。

俺の勘はよく当たる。

何も無いことなんてたぶん無いんだろう。

着いたところで仁の視界に飛び込んできたのは、いつも追い払っている賊の一人と思われるおっさんが、今まさに村人に剣を振り下ろす瞬間だった。

ザシュツ

「ぎゃあああああ」

村人の左肩のあたりから右のわき腹らへんまでに赤い線が入りそこから赤い液体が噴出していた。

「ぎやはははは、俺様に逆らうからこうなるんだよ！お前が今から死ぬのは鬼の子が俺に情けをかけて生かしたからだよ！恨むなら鬼の子でも恨んでな！！」

「お父さん！！お父さん！！」

俺はただ漠然とその光景を見て立ち尽くしていた。

今まで自分の体が刃物で何度か斬られたことはあったが、かすり傷だった。

なんでこのオッサンを生かしたのか？情け？ちがう、怖いからだ。

殺すのが怖い、人を殺すのが怖いし殺されるのも怖い。

前世の記憶が軽く残っている俺には殺人なんて出来ないしされたくない。

でも、俺の恐怖心のせいで、今泣き叫んでいる子供の父親は死ぬ。

俺のせいで死ぬ。

その子供の心も死ぬ。

全部俺のせい。

何故もつと早くここに来なかった、何故あのオッサンを殺さなかった、何故、この世界で生きる決心が早く出来なかったんだ。

一瞬呆けていた俺は山賊のオッサンのところへと歩き始める。

「おお、鬼の子か、テメエのせいでこの餓鬼の親父は死んだんだよ、どうするのかな？俺を殺すのかな？無理だよねえ、鬼の子と呼ばれていても所詮は子供、どんだけ強くても餓鬼だもんなあ」

薄ら笑いを浮かべているこのオッサンを俺はただ黙って見ていた。

明らかに逝ってしまっている目、がりがりの体、痩せこけた頬、そうかオッサン、苦しかったんだな。

俺がお前等の稼ぎ場所を守ってるから苦しかったんだな。

今のご時勢から考えて、働き口がなかったから山賊になるしかなかったんだろう。

でもな、

それでもな、人は殺しちゃいけないよ。

少年 s i d e

お父さんが、山賊に斬られてから僕はただただお父さんの側で泣き続けていた。

「おお、鬼の子か、テメエのせいでこの餓鬼の親父は死んだんだよ、どうするのかな？俺を殺すのかな？無理だよねえ、鬼の子と呼ばれていても所詮は子供、どんだけ強くても餓鬼だもんなあ」

山賊がそんな事をいったと思い顔を上げると、そこには鬼の子とよばれている仁君が立っていた。

仁君の顔は無表情なんだけど、なんとなく哀しげな顔をしてると思った。

「……ちゃ…いけないよ」

ふと、仁君が話したと思った瞬間だった。

一瞬で山賊との間合いをつめて、お父さんの使っていた剣をいつのまにか持っていた仁君は、体勢を前傾に倒した状態からその剣で一気に右の腰の辺りから首のあたりまで斬り上げた。

「うわあああああああああああ」

悲痛な叫び声をあげながら。

仁 s i d e

人を斬った。

自分の手に人の肉の感触、骨の部分の感触が生々しく残っている。

それに俺の顔面に返り血が飛び散り、その血は生暖かく、そして倒れていくその山賊のオッサンの目が俺を見ていた。

「うつっ…うつげっ……………う」

俺は吐いた。

その場にひざをついて、吐きまくった。

一通り吐くと、今度は辺に落ち着いて頭が理解しだす。

人を殺した。

俺はこの人を殺したんだ。

この人にだって家族がいるんだ。

この人にだってまだまだ人生があっただんだ。

ソレを俺は奪った。

吐くものを吐ききると今度は涙が止まらなくなった。

怖い、怖い、怖い。

恐怖で体が震える。

どうしたらいいのかわからない。

あの父親の子供は怖かったのか逃げていた。

そらそうだ、俺だってこんなに怖いんだからな。

でも本当に怖いのは殺したことじゃない。

人を殺したのに、人を殺すことにすこし興奮してきている俺自身が一番怖い。

分からない分からないワカラナイ…………

ナンデコンナニモコウフンシテルンダ…………

「うがあああああああああああああああああああああ
あ」

何も分からなくなった俺は叫びながら人から逃げるように、村を飛び出したのだった。

漢 - 2 (後書き)

いかがでしたでしょうか。

文才の無い自分が嫌になりますが、気にはしないようにします。

さて次回は、恋姫キャラとの初接触を目論んでおります。

まだまだ試行錯誤を繰り返している段階なので、また更新は遅くなるかもしれませんが、作者も頑張る予定なので生暖かく見守って頂けたら嬉しいです。

漢・3（前書き）

遅くなりました、シャケです。

書いてて改めて思いましたが、文才が欲しかった今日この頃ですね
……

漢 - 3

気がつくとそのは、動物の楽園だった。

「あれっ、何だここは……それに俺は確か……」

まだ寝起きでぼーっとする頭を動かしながら、今までの事を思い返す。

人を殺したこと

今では何故か落ち着いて思い出せる。

無我夢中に山賊のオッサンを切り捨てた俺は、
自分が分からなくなって、怖くなって……

逃げた。

ひたすら遠くに、

人に会わぬよう獣道を走り続けた。

どれぐらい走ったのかは知らない。

日が何度昇ったのかもあまり覚えていない。

恐らく、空腹で倒れたのだろう。

ぐうううう……

「腹へったな……てかこの犬とか猫とかは何だ？それに……」

仁が顔を真横に向けるとそこには、赤紫っぽい髪の褐色肌の少女がすやすやと眠っているのが見えました。

あれっ、なっ なっ なんで！？

てか、誰！！？？

それに、何故か動けないなあっと思ったら、この少女が仁の身体を抱きしめながら眠っているからだった。

「……良い匂いがするぞ……」

それから数刻、仁はその少女が昼食を食べているときに目を覚ました。

「ん……おきた？」

「ああ、なんか後頭部がズキズキするが、寝起きだからしかたないのかな」

朝の記憶がすっとんでいる仁だった。

「てか、ここは？それに君はなんていうの？」

「……ここは、恋のおうち。……恋は呂布……奉先」

呂布は買ってきたのか、肉まんをはむはむと食べながら答えてくれた。

ぐるぐるるるうううう……

「悪い、呂布。俺にもその肉まんをくれないか？腹が減ってしかたないんだ」

「…………ん」

そういつて、呂布は持っていた肉まんのうち2つを俺に差し出してくれた。

俺はそれを受け取ると飲み込むように食べた。

「ふう、生き返った。ありがとな呂布」

「…………別に…大丈夫」

俺が食べ終わって、呂布に頭を下げると呂布は別段気にしている様子もなく、周りの犬猫たちと戯れていた。

「あと、忘れてたが、俺は性は孫、名は海、字は悟空っていうんだけど、呂布は俺の命の恩人だから真名を預けたいんだが、受け取っ

てもらえるか？」

「……ん…大丈夫、孫海…いい人っぽい」

「ありがとう、俺の真名は仁。よろしくな呂布」

「……………恋でいい」

「って、それは、真名だろ!？」

俺が助けくれたお礼に真名を預けると、呂布は自分の真名の恋を俺に預けようとしたのにはかなり驚いた。

「…仁は恋に真名を預けてくれた。…それに…仁は良い人……だから大丈夫」

無表情だが確かに強い意志のこもった目で見つめられた俺は折れるしかなかった。

「わかったよ、恋。本当にありがとうな」

「…………ん」

相変わらず無表情だが、俺にはわずかに喜んでるような気がした。

「ところで、恋の両親は？助けて貰った手前挨拶はしときたいんだけど…………」

「……………とと様とかか様は死んだからいない」

恋のその言葉にバツが悪くなった俺は恋に謝ったが恋は「…大丈夫」と言ってくれた。

だが、ふと疑問に思った。

これだけの動物達と生活するにはそれなりに金が必要だと思っただが…………どうやって稼いでるんだ？

「じゃあ恋は一人でこの子達と生活してるんだな？」

「…………コクコク」

恋が首を縦に振る。

つまりYESということだな。

「じゃあ、どうやって生活の金を稼いでるんだ？」

「……………傭兵？」

いやいや、そこで首をかしげられても困るのだが…

「傭兵って事は、恋つてもしかして人を殺した事あるのか!？」

つい最近初めて人を殺してしまったせいかな、かなりの剣幕で聞いていた。

「…ある」

恋は少し俺の様子に怖がったような表情を、見せたが答えてくれた。

俺とそんなに変わらない位の子が、俺よりも人を殺した事があるのか…………

「……………仁は人を殺した？」

恋の質問に少し間を置いて俺は静かに頷いた。

「……怖いのか？」

「恋は怖く無いのか？人を殺してるんだぞ？確かに悪いやつだったかもしれないが、それでも同じ人間なんだ。そいつにもまだ人生があつたのにそれを奪つたんだぞ？」

俺の話は恋は黙つたまま聞いてくれた。

「俺は怖い。死ぬほど怖い。あの殺した人の家族や友人が俺を殺しに来るかもしれない。それも怖い。だがそれよりも、俺はその人の人生を背負つて生きなきゃならない。その重みが一番怖い。」

話してると怖くなってきて身体が震える。

今までどんな奴と相対しても恐怖したこと無かつたのに、今はただ奪つた命の重みが怖い。

ふと、俺の身体が温もりに包まれる。

「……仁、怖かった、でも今は平和じゃない、平和じゃないと闘わないといけない、生きてくために闘う。その人の命は重い、けど負けるのは駄目」

俺の身体を包んだのは恋の温もりだった。

「……ただ人を殺すの良くない、生きるために殺さなくちゃならない人もいる。……自分勝手って言われても生きなきゃ駄目」

恋は多分というかほとんど話すのは苦手なのだろう。

だけど、今、一生懸命に俺に生きろと、その重みも抱えても生きろと言ってくれてる。

殺しに良いも悪いも無いだろう。

しかし、奪わなければならない命もあるのだ。

そして俺は、その命を背負って生きなくちゃならない。

どんなに自分勝手でもなんだろうと、奪った命に報いる為に生き抜いて行かなきゃならない。

「……大丈夫、恋は仁の事嫌わない」

この言葉だけでも、俺は救われる。

気がつくと俺は恋の腕の中で泣いていた。

どれぐらい泣いただろう。

「恋、もう大丈夫だ、ありがとうな」

そういつて恋から離れる。

「……よかった」

「本当にありがとうな」

「……別に大丈夫、仁、辛そうだったから、でももう大丈夫」

……どうやら、かなり大きな借りが出来たな。

俺は、寝台から降りて床に座り頭を下げる。

「恋、お前には返しても返しきれない恩ができた。またこんな事を言うのは図々しいかもしれないが、頼みがあるんだ」

恋は俺の行動に少し驚いてるのかしゃがみこんで俺を見ている。

「俺をここに置いてくれ！！お前の力になりたいんだ！！」

頭を地面にすりつけながら頼んだ。

所謂、土下座だ。

しばらくして、恐る恐る顔をあげる。

「……………仁は恋の家族になる??」

恋は一生懸命考えてくれてるみたいだ。

「おう、家族になる、家族になつてお前を守る!!」

「……………恋が仁を守る、だつて家族だから」

あれ?

守られるの俺?

まああれだけ泣いてるのを見たらなあ…………

いやいや、そこは俺のプライドが許さん。

「なら、俺は恋の兄貴になる!!兄貴は妹を守らなくちゃならないから、俺が恋を守る。こればかりは譲らん!!」

「…仁兄い??」

「宜しくな、恋！」

そういつて恋の頭を撫でてやると気持ち良さそうに目を細めていた。

その日は、恋の家族に盛大な歓迎を受けるのだった。

俺は世界で一番大切にすべき物ができた。

たった一人の妹、呂布こと恋を、俺は絶対に守ってみせる。

俺は、もっともっともっと強くなってやるからな！！

漢 - 3 (後書き)

はい、恋ちゃんと義兄妹になりましたあ!!

もしも恋ちゃんが妹だったら確実に作者はシスコン街道まっしぐらだったでしょうね!!

すみません、興奮してしまいました…

とりあえず、初の恋姫キャラは恋ちゃんでした。

次回からはしばらく妹恋ちゃんとの拠点みたいな物をしながら着々と成長させる予定です。

出来るだけ早く投稿出来るように頑張ります。

ではまた次回に会いましょう。

漢 - 4 (前書き)

ども、遅くなりました。

文を書くのって本当に難しいですね……

改めて、他の作者の皆様の凄さを感じました。

もし、何かこの作品がオカシイ事になったとしても、見守って頂けると嬉しいです。

ふわあああ……

ども、仁です。

……
昨晩は動物達の熱烈な歓迎によって疲れ果てて眠ってしまいました

ちなみに、恋は俺よりも先に寝台に寝かせた……はずなのに何故？

「すう……すう……」

俺の横で俺の腕を抱き抱えて眠っているのは本当に何故なの？

「恋、何でここで寝てるんだ??」

「すう……兄い……」

はう!?

可愛すぎだろこれは!!

「何だこれ、なんなんだよおおお!!!!」

「……………うるさい」

そしてまた俺は眠り（強制的）につくのだった。

まあ、朝っぱらから軽く問題があったが今はようやく朝食を食べることに成功している。

「恋、傭兵の仕事って基本的にどんななんだ？」

「……………賊の討伐とか、用心棒」

マフマフモフモフ……

はい、会話終了。

恋ってやっぱり基本的に無口なんだな。

まあ、朝食（恋が買ってきた肉まん）をただひたすらに一生懸命食べてる恋はなんか可愛いから許す。

「じゃあ、今日このあと俺も恋の仕事手伝いに行くわ」

「…………兄い、大丈夫??」

少し心配した表情で俺のほうを見る恋（肉まん装備）は、恐らく傭兵の仕事の中に、人を殺さなくてはならないことがあるのだろう。

だから恋は心配なのだろう。

可愛いやつめ…………

「…………ん／／」

軽く恋の頭を撫でてやる。

「大丈夫だ、心配すんな。俺はお前を守る。覚悟も決めた。後は精神を鍛えるのみだ」

「…………無理しちゃ駄目、兄いは恋が守る」

逆に恋も俺の頭を撫でる。

ちょっと照れるなこれ…

「わかった、無理はしない。でも俺が恋を守るんだ、ここは譲らん。兄としてな」

「…………むう」

少しむくれたような顔になったな。

若干だがな。

「…………兄い、武器は？」

「武器？俺の体が凶器だ」

な、なんだ！？

呆れたような目が俺を射抜いてるんだが……

「恋、本当に俺の体が凶……武器なんだよ」

「…………駄目、そのままじゃ怪我する。武器はもうつからあとで一緒に町に行く」

「いや、俺の体が…………」

「……駄目」

「了解しやした」

恋の有無を言わさない視線に、今まで負けた記憶のない俺の心が一瞬で破壊された……

はい、町に来ました。

手抜き？知りませんそんな事は。

「ほお、ずいぶんと賑やかなところだなあ、俺の住んでた村の数百倍は賑やかだな」

「……兄いの村は賑やかじゃない？」

「いや、田舎の村だったし、そんなに大きくないからここまで賑やかじゃないだけだ」

まあ、あんな森の中にあるわずか40人ぐらいの超小さな村と、家と人だらけのこの町を、比べるのは間違いだと思うけどな。

そんなことよりもだ。

「恋、手を離してくれ。なんか妹に手を引かれるのって恥ずかしいし」

「……………ブンブン」

首を横に振る↓否定

「どうしても手を繋いどかな駄目か？」

「……………いや？」

「嫌じゃないに決まってるだろ！！」

ふふふ、あんなウルウルした目で見られて断れる男などこの世に存在せぬわ！！

「恋、肉まん食べるか？」

「……………コクコク」

ああ、恥ずかしいけど和むからすべて良しとする。

しばらく町を歩いてると、見るからに『武器防具等扱ってます』みたいな店についた。

「……………店主さん」

「おお、呂布様。お久しぶりで御座います。今日はどのような御用事で？」

見るからに商人の初老のオッサンだなコイツ。

「……兄いの武器と防具を売って欲しい、お金はまた依頼で払うから」

こりゃまた突然言っね恋ちゃんよ。

「アナタは、呂布様のお兄様なのですか！？いつもお世話になっております」

「一応、義理だが兄妹だ。それと此方こそ多分世話になってる」

「いえいえ、私なんかは、呂布様が活躍される度に家の武器や防具が売れに売れるのですから、本当に有難いことですよ」

という事は、恋の方天画戟（恋にはまだまだ大きすぎるのでは？）を作ったのはこのオッサンか。

「とりあえず、武器を見せてくれ。代金はさっき恋が言った方法で必ず払う」

「どうぞどうぞ、ゆっくり見ていって下さい」

そういうと店主は、店の奥に一度戻った。

「初めて見た時から思ってたけど、恋ってやっぱり強いんだな」

「……兄いも強い」

「ああ、強いに決まってるだろ」

流石は俺の妹（昨日から）、よく分かってるな。

まあそんな他愛もない会話をしながら武器を見ていく。

うむ、剣も捨てがたいが槍もいいなあ。

でも……

「店主、この店で一番大きい直槍を見せて貰えないか？後は、手甲と脚甲も一番丈夫な奴を頼むわ」

「一番大きい直槍と、丈夫な手甲と脚甲ですね。直ぐに用意致します」

そういうと店主は、店の従業員っぽい男を5〜8人連れて店の奥に入って行った。

ふと、恋に目をやると、何処で買ったのか知らない肉まんを、店の前でマフマフしてた。

和むな……

しばらく恋で和んでいたが、店主が何か引き連れて出てきた。

「はあはあ、こ、こちらが当店で一番大きい直槍で、こちらが丈夫な手甲と脚甲です」

見るとそこには、大人8人で運ばれてきた、長くてかなり重そうな朱色の直槍。

それに、店主の持っている赤と黒の模様の手甲と脚甲と、俺の頼んだ理想通りの品々が出てきたのだ。

そして、俺は思った。

凄く品揃えが良いなココ……と。

「しかし、手甲と脚甲は大丈夫でしょうが、直槍は貴方様には重くて持てないとおもうのですが……なにせ、この直槍は先代の頃からあるのですが、未だに誰も扱えないのですから」

なんだとコノヤロー。

舐めやがって……

俺様に持てないだと、やる前から諦めてどうすんじやい!!

「じゃあよ、俺がこの直槍を一人で持ち歩けたら、タダで譲ってくれよ」

……

一瞬にして沈黙したオツチャン+従業員共だったが、すぐに笑いだした。

「はははっ、いくら呂布様の御兄妹といってもこの武器は持てませんよ。もしも持てるのなら良いでしょう、全部タダで差し上げます

し、此方の手甲と脚甲も成長に合わせて調整するのもタダでやらせて頂きますよ」

「ふはははは、言ったなオッサン、今の言葉忘れるなよ!!」

「ただし、持てなかった場合は依頼の量を倍にさせて頂きますからね」

「構わねーよ、俺様を舐めるなよ……」

見たら誰もが無理だと言っだろう。

だからこそ、やる意味があるのだから!!

従業員共が床に槍を置くとズシンと音がした。

俺はその直槍の丁度真ん中の辺りを右手で掴んだ。

「おいおい、コイツ片腕で持ち上げようとしてるぜ……」
「頭オカシインじゃねえのか……」

周りで何か言ってるが関係無い。

俺は右腕に力を込めて持ち上げる。

すると徐々に持ち上がってきた。

「うおおおおおおおおお！！！！おれをおなめえるうな
ああああああ！！！！！！！！！！」

周りで笑って見ていた奴等は皆黙った。

何故ならあの槍が宙に浮いたからだ。

そして、落ちてくる槍を仁は右肩で担いだのだった。

「……さすが、兄い」

今まではーっと見ていた恋が、俺にピースしていたので俺もピースで返した。

「…し、信じられない、この槍を片腕で持ち上げたなんて……しかも、まだ子供なのに………」

店主と従業員共は、信じられないものを見ているような顔をしていた。

ふふふ、ざまあ。

「とりあえずオッサン、賭けは俺の勝ちだ。この槍と手甲に脚甲は貰っていくからな」

仁は笑顔でそう言って、恋に手甲と脚甲を持たせて店を後にした。

「あの！！お客様、お名前を！！」

「ああ、俺は孫海、よく覚えとけ」

そう言って本当に店を後にした。

店を出てから城の方に向かってる途中だが、一つ言いたい事がある。

「……兄い、重い？」

「ええ！？重くないよ全然、全く、欠片も！！」

そう言つて槍を片腕で上げたり下げたりする。

言いたい事つて言うのは……

重たああああああい！！

けども恋の前で重いなんか言いませんがね。

俺は担ぐ肩を左右ちよこちよこ変えたりしているが、そろそろ下半身が限界っぽいな、プルプルしてきたぞ……

「……兄い??」

「どうしたあ恋！！俺はなんともしないぞお！！」

そして、跳ねたり振り回したりしていた。

しばらく歩くと、城に着いた。

ふふふ、男は少し見ないと大きくなるって誰かが言ってた気がするが、俺もこの城までの道中で強くなった気がするわ。

既に限界を超えた俺の両腕と両足には感覚が無いがな！！

「はーはっはっはっはっはあ！」

「…兄い大丈夫？」

「何でもない、笑いたかっただけだ」

そしてまた槍を振り回すのだった。

漢 - 4 (後書き)

はい、やりましたね。

大人8人で持つ槍を片腕って……

筋力LV的には魏の許緒や典韋とか以上にすでになってしまいました。

ちなみに、直槍はあの戦人の朱槍をちょっと大きくした物をイメージして下さい。

主人公の前世の名前も軽く似せてるので、やはり武器も……って思ったのであります。

手甲と脚甲は魏の楽進の奴と同じ感じで、メイン黒で赤装飾みたいなさんをイメージして頂ければ嬉しいです。

次回も作者なりに早く仕上げれるように頑張ります。

漢 - 5 (前書き)

初の連投です。

酷い出来かもしれませんが、見守って頂きたいです。

あの後、城に行つて受けた俺の初依頼が「賊討伐」っていう、いかにも初歩的な依頼だ。

依頼を受けて俺と恋は、町から少し離れたところにある村に来てる。

「えっと、たしかこの村にちよくちよく手を出してる賊の壊滅が、今回の目的だよな？」

「……コクコク」

今は村の長に用意してもらった、素敵な小屋（村の入り口付近）にて二人で身体を休めてるところだ。

しかし、

「いくら、俺達が2人だけだから信用できないからって、この扱いは酷いよな……恋、寒くないか？」

「……ん、大丈夫」

季節はよく分かんが、今は夜になると結構肌寒い。

それを、よく分からん布切れを2枚だけで、しかも、この小屋ぼろぼろだから隙間風とかハンパねえから寒くてしゃあねえ……

「ふえ、ふえ、ふえつくつしょん！！ああ、クソ！！」

さすがにちよつと寒いな。

「…兄い、こつちくる」

「いや、でも、それは…」

「…じゃあ、恋がそつち行く」

「いや、だから、それも…」

今、俺と恋は部屋の隅に離れて座っているのだが、俺が寒そうにするたびに恋が俺の側にこようとするから困ったもんだ。

いくら、兄妹といっても、女とく、くつつくなんて……／／／

それだけは、ちよつと俺が耐えれんから無理だ。

「…兄い、寒い」

「じゃあ、俺の使ってる布も使えよ」

「……………」

俺が布を渡したが、恋は俺の事をジーツと見ている。

俺が寒いから近づこうとしても無理だから、自分が寒いといって近づかせようなんて、恋にしては結構頭を使ったかもしれないが、俺がこの程度の策で引つかかると思っなよ!!

「ふあつくくしょん!!!!」

「……………兄い」

「いや、寒くないからな、全然、ちょっとくしゃみしてみただけだから」

「……………そんなに恋とくつつくの嫌？」

俺が頑なに拒否してたら、遂に恋が、目をウルウルさせてそんな悲しいことを言った。

「いや、嫌じゃないよ!!!嫌じゃないけど……………なんていうか……………恥ずいっていうか……………その……………」

「……………?？」

ここで、疑問系ですか。

はあ

「分かった、寒いからこっち来てくれ、恋」

「……………ん」

俺がそう言つと少し嬉しそうにひよこひよこ俺の隣にきて、羽織
つている布を俺の身体にも羽織らせ、肩を摺り寄せてきた。

「…………兄い、暖かい」

「そだな、暖かいな」

さつきまで、色々考えていた自分がなんか馬鹿みたいだな、恋は俺
の妹なんだから別にくつついても問題なんか無いよな！！

「うひゃ！！恋、どこに手を入れてるんだ！！」

「……兄いの服の中も暖かい」

いや、やっぱ駄目だ、頭がクラクラしてきた。

相手はまだまだ俺と同じぐらいの子供といってもやっぱり女の子は俺にはキツイ……

その後、賊が現れる時まで俺が色々と戦っていたのは言うまでもない。

「……くる」

「ああ、そんな気がする」

しばらくして、俺と恋は村の入り口のほうから嫌な感じが近づいてきてるのに気付いた。

「よし、精神修行始めますかー!!」

「……兄い」

「ああ、無理はしない」

俺がそう言つと恋は頷いて、2人で小屋から出て入り口の所で待機することにした。

程なくして、いかにも怪しい集団が俺と恋の前に現れた。

「ああん、てめえらみてえな餓鬼がこんな村の入り口で何してんだあ？そんな危なっかしいもの持って…」

一番先頭にいた、ひげ面のオッサンがそういった。

「えっと、とりあえず……誰が餓鬼だつてコラー！」

「…兄い、駄目ー！」

あんな弱そうな奴に馬鹿にされて、突っ込もうとしたところを恋がとめてくれた。

「なんだあ、小僧、俺達になんかすんのかあ？」

「やめてやれよ、怖がつてんだからよお」

となりの、チビの親父もなんか言ってる。

まずは、我慢だ。

「あの、おじさん達はここに何か用ですか？」 ↑超棒読み

「とりあえず、金と食料と女をまた貰いに来ただけだ、なんならお前の隣にいるお嬢ちゃんを貰ってやろうか？」

いやらしい目で恋を嘗め回すように見るおっさん。

「……見るな、下種」

恋は見るからに怒っている目を賊に向けていた。

「恋はやらん。あと、お前等、改心する気は無いのか？」

最後忠告だ。

「餓鬼がえらそうな事言ってるじゃねえ！！帰ってどっかで震えろ！！」

あ、無理。

「テムエ等、今までやってきた事と、恋に変な目を向けたこと、それに俺を馬鹿にしたこと……………全部まとめて後悔させたるわあああああ!!!!!!」

俺は持っていた朱槍を肩に担いで走り出し、接近してきたやつらに
対して、朱槍を片腕で全力で横薙ぎに振った。

恋
S
i
d
e

「テムエ等、今までやってきた事と、恋に変な目を向けたこと、それに俺を馬鹿にしたこと……………全部まとめて後悔させたるわあああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

そういつて、兄い
が走りだした。

「舐めるなよ、クソガキが！！野郎共、やっちまえ！！！」

頭目らしき男の命令で、前のほうにいた奴等が全員武器を構えて兄
いに向かって走り出した。

恋は、兄いが危ないと思って走り出したけど、心配なかった。

兄いは賊が武器の範囲内に入るとすぐに槍を片腕で持ち、

「うっうっうらあああああああああ！……！！！」

槍を横薙ぎに振るったのだった。

すると、槍の棒の部分にいた奴等は、槍をはじこうとしていたが、その持っていた剣ごと頭を碎かれていた。

そして、槍の刃の部分にいた奴等は、特に何も出来ずに頭と胴体が永遠の別れを告げた。

今の一撃で10人は死んだ。

「……すげい」

ただただ、真っ直ぐに横に振るわれた槍の軌道はとてもきれいで、一切ずれることなく振るわれた。

兄いは、とても辛そうな顔をしてる。

恋が、頑張らないと！！

そして、恋も賊に斬りかかっていった。

仁 side

朱槍の一撃は凄まじいものだった。

もともと、規格外の長さに重さの槍だったのだから、その威力は恐ろしいと思った。

まあ、振るえる俺も十分におかしいだろうが。

ただ、槍で奪った命は恐らく10人程。

たった一撃で10人の命を奪った。

覚悟は完全に決まった。

俺は閉じていた目を開けて高らかに叫んだ。

「俺の名は孫悟空！！これより鬼となる！！！」

そう叫んで、槍を賊に向かって一直線にぶん投げた。

その槍は次々に賊を巻き込んで、殺し、地面に突き刺さった。

賊共の目にはただ恐怖しか見えなかった。

「死にたい奴からかかってこいやあああ！！！！」

俺は手甲と脚甲のみで賊の集団に突撃していった。

しばらくすると、そこには俺と恋、それに賊の頭目らしきオッサンしか残ってなかった。

「ひい、すみません！！なんでもします！！だから命だけは助けてください！！！」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で懇願してきた。

「男なら責任は取れ！！」

俺は全力で頭目の首を蹴りでへし折った。

体中の血液が脈打っているのが分かる。

俺も恋も返り血で真つ赤だった。

「くうう、つがああああああああああああ！！！！！！」

吐き気が凄まじく襲ってきたが、俺はソレを耐え抜き、今は気持ちを静める為に地面をただ殴り続けていた。

地面はかなり陥没し、手が軽く出血し始めたころ、恋が、後ろから急に抱き着いてきた。

「……兄い、頑張った、えらい。だから、もう帰って休も」

優しく語り掛けるように恋は言った。

すると、興奮していたのが、徐々にであるが落ち着いてきた。

「ふう、ふう、はあ、………恋ありがとう。とりあえず、もう大丈夫だから」

「………ん」

俺は恋を先に村に行かせ、一人でこの賊全員分の墓をまとめて作った。

死体をすべて地面の穴に納め、埋めて、その上に石を置いて墓を作った。

「俺の自己満足かもしれないが、安らかに眠ってくれ」

簡単にであるが、賊を弔い、村に戻った。

村に戻るとすでに恋が報酬を貰っていたので、すぐに家に帰る事にした。

帰っている途中、恋は俺の手を離さなかった。

家に帰って、食事にしたが、俺は全然食べられなかった。

そして夜になっても、なかなか眠ることが出来なかった。

目を閉じて思い出すのは、肉の感触、骨の感触、断末魔……

俺は弱い。

今も、恋に手を握ってもらってなんとか落ち着いてる状態だ。

恋は、今までに何度こんな夜を一人で過ごしたのだろう。

やはり俺は弱い。

恋の手を少し強く握ると、恋は握り返してきた。

「…………兄い…………むにや…」

そうだな、俺はこの子の兄なんだ。

ならば、この子を守るためにも俺は強くなろう。

絶対に強くなってやろう。

俺は、改めてこの世界で生き抜く事を、自分勝手かもしれないが、奪った命の分だけ生き延びる事を、天に誓った。

俺は、まだまだ強くなる。

漢・5（後書き）

よし、とりあえず早く本編に行きたい。

なので次回はちょっと時間が飛ぶかも知れませんが、その辺は暖かく見守って頂きたいです。

駄作は駄作なりに一生懸命頑張りたいと思います。

漢 - 6 (前書き)

ども、シャケです。

日本語って難しいなって、小説書いてるとよく思います。

ういつす、仁です。

早いもので、俺が恋と兄妹になってから2年経ちました。

もちろん、その2年間は、恋と遊んだり、賊討伐したり、用心棒やったり、恋と勝負したり、町で喧嘩したり、喧嘩したり、喧嘩したり、喧嘩し……

色々あったが、こんな感じで俺も14歳になった。

「デメエ！！今日という今日は許さねえからな！！」

とまあ、今も喧嘩中だったりするのだが…

最近実はちょっと困っていたりする。

まずは、恋の食費だ。

「この野郎！！死ね！！」

成長期という事もあってか、もともと良く食べるのが、恐ろしく良

く食べるようになったりしたから結構食費が掛かる。

「うらあー!」

あと、恋に身長が抜かれた事だ…

女は成長期が男より早かった気がするから、仕方ないと言えば仕方ない。

俺も最近ようやく成長期に入ったのか、だいぶ追いついてはきたが

……

「ガブア! ? こっこの…クソ野郎……が……」

え?

喧嘩?

してるよ、もう終わりそうだけど。

そんな事よりも、一番の問題は……恋は成長期でちょっとむっ胸とか出てきてるのだ。

それなのにあるう事が未だに俺に抱きついたりしてくるのだ!!

何時でも何処でもすぐに抱きついてくるのだぞ! ?

そりゃ、愛情表現なのは分かってるんだが、あの…胸やら…その…
…太ももとか…あああ！！

とにかく！！俺の精神ではあんまり耐えれ無いのだ！！

はあ…

嫌じゃ無いんだよ、嫌じゃ無いんだけどな、その……な、恥ずかしいんだ。

俺は前世の頃から、女というのが苦手だ。

興味が無い訳では無いが、どうしても女に対して緊張してしまうんだ。

今はまだ俺自身が子供だから、周りにいる女も子供だ。

だからこそまだ大丈夫なのだな。

「っと、色々考えてたら片付いたな。そろそろ帰るか」

俺は周りのゴミ（オッサン×3）を路地裏に纏めて、帰るため、ゴ

ミを担いで路地裏に入った。

路地裏に入って少し進んだ所にゴミを捨てて、帰ろうとした時、ふと視界に人が倒れてるのを見つけた。

「おい！？大丈夫か！？……こりやかなり弱ってるな……しゃあねえ、連れて帰るか」

倒れていたのは、水色の髪小さな女の子だった。

俺はその子を背負い、急いで家に帰った。

???side

「う……うん……あれ？」

ここは、どこなのですか？

えっと、ねねは、陳宮、字は公台で、真名を音々音と言つのです。

ねねは、住んでいた村を賊に襲われた時に両親を無くし、命からがら逃げていたのですが、何日も何も食べなかったのてたしか何処かの町で倒れたと思うのですが……

うん？

何やら良い臭いがするのです。

「お、目が覚めたか？とりあえず、これでも食べ、温まるぞ」

そこには、赤い短髪で褐色の肌、蒼い目が特徴的な、少し怖い目付きの男が、肉まんとお茶を持ってきていました。

「あ……その……」

「ああ、怖がらなくても何もしないから大丈夫だ。とりあえず、腹減っただろ？」

その男が少し怖かったのですが、意外と優しくそうな笑顔でそう言ってくれたので、安心したのです。

ねねは、肉まんとお茶を受け取り、一生懸命味わって食べたのです。

ああ、美味しいのです。

仁side

うえ！？

何か急に泣いてるねんけど！？

「ど、どうした！？どっか痛いのか！？」

するとその子は、涙を流してるのに自分で驚いていたが、

「いや、久しぶりに優しくされたので、多分気が緩んだだけなんです」

そう言って、また笑顔で肉まんを食べていた。

「あの、今回は助けて頂いてありがとうございますのです」

「いや、大丈夫だ。俺は孫海って言うんだ、宜しくな」

「あつ、ねねは、姓は陳、名を宮、字を公台と言つです」

ふーん、陳宮ね。

すると丁度、遊んでいた恋が帰ってきた。

「兄ただいま、……その子、誰？」

「おかえり、恋。この子は陳宮って言って、俺が町で倒れてたのを見つけたから、連れて帰ってきたんだ」

「…ちんきゅー、か」

「はい、陳宮なのです、孫海様、此方の方は？」

「ん？この子は呂布って言って、俺の妹だ。あと、様っていうのはやめてくれ」

「はいです。じゃあ孫海殿で」

俺達は簡単な自己紹介を済ませて、陳宮の話を聞く事にした。

「うう、陳宮、よく頑張ったなあ」

話を聞いて、ついつい泣いてしまった。

可哀想に、こんなに小さいのに両親を賊に……

よし!!

「なあ陳宮」

「はい、どうしたのですか？」

「俺達の家族にならないか？っていうかなれ。俺が面倒見てやる」

陳宮はかなり驚いているようだ。

え？何で家族にするかって？

当たり前だろ？

可哀想だし、まだまだ子供なんだから。

「…ちんきゅー、恋達と家族なるの嫌？」

恋も賛成派だな。

「いや、嫌じゃないです！！でも……迷惑なのではないですか？」

「「そんな事ない」」

ふふ、恋と被ったな。

「うう、嬉しいです。ねねは、真名を音々音と言っです。音がうつで音々音です、ねねって読んで欲しいです！！」

「…恋、ねね、よろしく」

「俺は仁っていう、これからよろしくな！！ねね！！」

「よろしくなのです！！仁兄様に恋姉様」

こうして、我が家に新しい家族ができた。

できたのだが……

「うわあああああああああ……！！！！！！恋、何故俺の布団にいる！？」

「……兄と一緒に寝たかったから」

「……ねね、何故お前まで俺の布団に？」

「いや、ちょっと寂しかったのです……」

「恋と寝てただろ？」

「夜中に、恋姉様が仁兄様の布団に行ってしまったので……」

翌朝、起きると離れて寝ていたはずの恋とねねが俺の布団で、両方から抱きついて眠っていたのだ……

はあ、恋のせいかな……

「はあ、恋。お前は女の子なんだから、男の布団に勝手に入るなっ

て何回言えば分かるんだ？」

「……兄いと寝たかった」

「うう、ごめんなさいです……」

うっ、ウルウル攻撃×2か…

効果は抜群だ！！

「分かった、分かったから泣くな！ちゃんと今度からは、布団並べて寝るから」

「……コクコク」

「はいです！！」

仕方なく、今まで少し離れて寝ていたのだが、今日からは、3人並んで寝る事になったのだ。

はあ、俺って甘いのかな……

その日また寝る前に、俺を真ん中で寝かせようとする問題が起こるのだが、それはまた別のお話。

漢 - 6 (後書き)

はい、ねねちゃん登場です。

仁はまたまた妹にしちゃいました。

ここで、仁についてちょっとした解説をしましょう。

特徴は、赤髪、短髪、褐色の肌、蒼眼、目付き悪い。

喧嘩をよく売られるのも目付きのせい。

たまに関西弁になる。(興奮したり、焦ってる時など)
理由↓前世で小さい頃関西に住んでいたから。

今の所はこんなところです。

ちゃんと成長しきつたら、また詳しく解説したいと思います。

では次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1869v/>

真・恋姫夢想 ～史上最強の漢～

2011年10月20日04時24分発行